木と共に歩んできて

谷光　一夫

聞き手・階戸朝海　櫻井萌子（石川県立田鶴浜高等学校１年）

宝達生まれ

昭和６年３月 22 日生まれ。家族はわたしと家内、子供は長男が今、高校の農業関係の先生しております。出身地は宝達。ここで生まれて育った。

子供の頃の夢

子供の頃はね、一応順調に育っていけばあの当時やから、旧制の中学校やねぇ。県立の羽咋中学校ですけれども、専門学校なり、昔の高等学校出て、そして会社。県庁にでもはいって、そして県の職員をしながら、林業の勉強をしてこうと思っておったんやて。そやけども、９歳でお父さんが亡くなって。お爺さんやお母さんに育てられたんや。まだ９つ位やから。お爺さんちゅうても、70 近くなっとるから。ほんで、大変やなぁちゅうもんですけど。私は９つぐらいじゃ将来のことを、あんまりとやかく思うておらんので。母は大変負担になったわけやろねぇ。当時は戦争中。日支事変（日中戦争）とか大東亜戦争（アジア・太平洋戦争）が始まる時期に向こうとるから、大変厳しい時代で。大学まで進もうと思ったんやけれどもお爺さんが 19 で亡くなったもんでね。上級学校や専門学校まで行って大学行くのを諦めて、家に入って農業、林業に従事したんや。そういうとこかね。

宝達山から流れてくる水

林業ちゅうのはね、植林からね。苗木を作ったりその苗木を山に植えて、植えた山の木を手入れをして、また大きなったら枝打ちや間伐をしたり、色々やって。この辺だと林があるでしょう、あんな林に育てるわけ。その木を、売って生計を立てるちゅう。それが林業。山は、大体 100 ヘクタールほどあります。

宝達の林業の歴史

もともと、宝達山ちゅうと、明治の時代までは、ほとんどはげ山で、宝達山は、明治以前は柴刈り山ちゅてね。あんたら、今、燃料革命で電気、ガスで生活するようになったけども、昔は皆山から薪を切ってきて、それをかまどに燃やしてご飯炊いたり、料理でお汁作ったりしたわけや。

1900 年当時は、一雨、雨が降り出すと、山に木がないと、降った水は全部地面の表面を伝って、川に流れて来るんやねぇ。大きい洪水となります。宝達山ちゅうと、花崗岩質の砂岩ばっかりのとこやから、降った水は浸透せず表面に流れて川に出てくる。そういうことで、もともとこの宝達山ちゅうもんは、低い川やったらしいげん。それが、上流の土砂が削られ削られして、だんだんだんだん 土砂が川下へ流れてきたと。宝達川の下に鉄道や国道が通っているはね。上流の土砂が削られ削られして、段々土砂が川下へ流れてきたと。昔は低いとこ流れとったやつが、段々少し高くなって川が氾濫するから、泥流れるやろ。そしたら住民が「さぁ川氾濫した」ちゅうことでその流れた砂を盛って盛って。何百年と経つうちにこんな天井川になったわけや。こんな天井川ちゅうと全国で、まぁ数箇所しかないがんないけ。高いところにあるから 、天井川ちゅうのや。

森作り協会

もともとはげ山で、はげとったところを明治以降に、地域の住民が集まって、「どうしたらこの災害がなくなるか」と言うことでいろいろ話し合いして、植林がいいなちゅうことで植林を始めたわけや。ところが、その時代はそれでよかったんやけれども戦争中、1920 年から 1935、1936 年にかけて、木材を強制的に伐採させられた時代があるんや。軍事物資っちゅう形で。強制的に「はい、谷光くんの家の山の木はこんだけ国へ出しなさい」「Ｂさんはこんだけ出しなさい」ちゅて、割り当てなったんや。それがあの戦争しとるもんやから。輸送船が必要やろ。家が必要やろ。そんな事でそんな木材がじゃんじゃん使われてん。なんか軍事工場を建てるための材木、今みたい鉄骨ばかりの建物じゃないあの当時はもうほとんど木造建築やったからねぇ。

会長は協会の運営とか予算とかねぇ、それからそういう行事、植樹やったりそれからまぁ、皆に植樹の大切さを講演といろんなイベントを通じて、知ってもろうと言う形で、協会の活動をしとるわけや。春か秋には１回植樹祭ちゅうて植林する行事を、会員がみんな集まって、一般の町民にも呼びかけてやるわけですねぇ。わたし元々林業を業としてずっと若いときからやってきた関係で、森林組合の役員になって、今じゃ 50 年以上前やけど組合長に選ばれた。そういうことで、森林組合の仕事に、ずっと携わってきたわけです。まぁ、自分の職業と兼ね合わせて。森林組合長、50 年ほどやりました。40 歳くらいから。そんな関係で、林業っちゅうものを非常に誇りを持っておった。この森作り協会を設立したとき、私らが設立員になって、会員を募って結成したわけや。そして、会長になれちゅうことでやらしてもらっている。任

期は３年です。３年に１回ずつ改選をしておるわけや。会費が 2,000 円で年間。会員が 50 人ほどおりますわ。これは宝達志水町が中心で、石川県全体から会員は、募っとるけど、加賀や能登の果ての人はおらんけどねぇ。口能登から金沢までの間の人は、会員になっとる人が結構居るわね。

宝達山の木と動物と川

若いときは自分で山へ行って木を植えたり、チェンソーで山行って切ったこともありますわ。今はもう、山の見回り。山にある木は、アテの木。アテの木ちゅうのは、檜に似た木や。ヒバの一種やけど。それから杉。杉はまぁ、どこにでもあるわねぇ。それから松とか、そんなもんを植林しとるのや。楓とか、栗の木とか朴の木とか。まぁ、楢の木とかねぇ、そうゆうものが落葉広葉樹。それから葉の落ちないものは常緑樹。この辺では熊が出るちゅうけど。熊はまだ見たことはないけど、うさぎとか、カモシカとか。熊はねぇ、よく出るちゅうげんけど、あんなもんに出くわしたら大変やわあぁ。宝達川の流域には、ため池は大小合わせりゃ数カ所あるかねぇ。山にとってとゆうよりも、下流の田畑の水を溜めて農耕用に。夏、水枯れを防ぐために。

宝達山の川は、相見川、宝達川、大坪川か、前田川。そして大海川。主だったものは、そんだけやないけ。うん。五河川かな。志雄は羽咋川や。

冬山の仕事

山の仕事って冬は出来んやろな。昔、道路が発達せん時代はよく冬、雪を利用してソリで材木を運び出した時代も、一時あったらしいけど。今は林道とか、道路あるから。昔は自分の家の材木を切って来て、家を建てるちゅうんなことあったから、切る時期ちゅうもんがあったんやてねぇ。その時期に、暦の上で八専とか色々あるらしい、その八専には木を切ったら、木が長持ちせんちゅうて言われて。昔はそれから、竹は壁のこまいに。今ほとんど壁に使わんが、小舞といって、竹で縦横に編んでそこへ壁塗る。お座敷では、群青色って青い壁、見たことあるでしょう。あの木の貼った部屋はねぇ、あれは皆中は今はベニヤに壁塗ってあれんけど、昔は竹をあんで、泥をかけるんや。塗って、乾かしたら、いっぺん乾かしたら、またその上へ中塗り、最後に仕上げで一掛け塗って、あの本場が出来るわけや。ほで今、竹はほとんど使うことがなくなったわね。

海は山の恋人

やっぱり本来は、広葉樹、ブナとか、栗とかナラとか。そういうものが、一番この水の浸透性がよくて、ほしてその落ち葉が腐って、鉄分が川を流れて、海へ入って、プランクト

（左上）イノシシの掘った穴
（左下）美しく穏やかな宝達山
（上）紅葉の始まる宝達山

ンを育てて、それが魚の餌になるとゆう。要するに、これが循環型社会で、海は山の恋人て言われますがどうゆうことやちゅたら、山のブナの一番鉄分を含んどるのはブナの葉っぱだし。ブナの葉っぱが落ちて、それが浸透して川を流れていって、海の魚がブナの栄養分をたべるちゅうことですね。

木と城

スギやヒノキなんかがなぜ植林されるようになったかというと、日本の戦国時代には、豊臣秀吉やら徳川家康やらのいろんな戦があったわねぇ。そして大阪城とか、名古屋城とか、静岡城とかってそうゆう有名な城はみんな、戦乱の時代の名残や。その戦乱の時代は、材木で必ず城を作るんや。広葉樹じゃ城は建たんわけなんや。そんなことで植林が盛んにされた時代があれん。それが、要するに戦乱の遺物や。そうゆうことから、立派な木を育てんと城ができんと、そうゆうことで植林された。今日、日本で有名な樹木、吉野杉。それからあの吉野の檜。ほれからあの青森のヒバ。そのようなものは皆、藩が奨励して植林せぇちゅてゆうた時代があって、林業が発達してきた歴史があるんや。

はげ山と天井川

昔ははげ山で、雨降れば鐘や太鼓で、この宝達山は全然針葉樹がなかってん。それで、住民は当時はガスや電気がないから、皆生活は全部薪でしたと。だから、私も子供の頃はね、ここへ柴刈りに荷車で来た。戦争中は、特にガソリンも無いし。ほで皆馬や牛で田んぼ作った。盛んにここへ馬が通ったがや。ほで私はあんまり柴刈りに来た覚えないけど。皆馬の餌を草刈に、宝達山へ盛んに上がったもんやね。馬引っ張ってわ。ほで帰りに、馬の背中へ草をどっさり、こんなんして。それが、草刈やけど。明治以前は皆、薪とりに宝達山へ。ほで今みたい個人所有じゃなかってんわ。自由山で、好き勝手に宝達山へ来て、誰でも薪を切ってきたんや。ほしたらみーんな押水っちゅうかこの辺の人ら、全部して山へ来て薪切るもんで、瞬く間にはげ山になってしもたんや。それで、この大水害が起きてそのたんびに川が反乱するから、住民が鍬持って川の堤防作った。それが今の天井川になったってゆうこと。そうゆうことから、植林を奨励した。まぁ終戦になるまで昭和 15 年から昭和 20 年までの間に戦争、ほして戦後復興という形で、材木をじゃんじゃん切って、また明治時代以前と同じような形で、一時的にはげ山になったんや。

植林の始まり

木材を切れるような状態になるのは 50 年。まぁ、100 年かかるねぇ。主に戦後植えた木が多いから、終戦後少しずつ切っとるのは、戦前に植えた木が残っとったっちゅうことやろねぇ。戦後、今日本で 10 万ヘクタール植林されたと言われとる。戦後 10 万ヘクタールも植林した国はどこにもないげん。で、将来はこの 10 万ヘクタールの植林がやね、見事に大木になったら世界遺産になるんやないかと言われとるような状況や。1800 年から 1900 年頃、大水害やら氾濫が起きたもんやから、皆こりゃたいへんやと。こんなこといつもいつもしとっても始まらんから、やっぱり植林するしかないっちゅうことで。今まで自由山、誰でも所有形態なしで、誰でも入って切っとったために山が荒れたから、これを分割して、そして皆して管理しようと言うことになって。今から 100 年ちょっと前に、この地域の人が集まって、協議して。この集落、ここは今押水、宝達志水町ですけど、旧の押

谷光さんはこれで木の年齢を調べる

水町と宝達山の河合谷、今の津幡町その辺の人らが寄って、分割したんやて、山を。そん当時は、集落単位に、分割してん。段々と集落で管理しきれんくなってなって、こりゃあやっぱ個人で熱心な人が管理すれば良いと言うことになって、今は全部、個人所有になっとるよ。

森作り協会

今この森作り協会で会員を募って植樹活動をやったり、講演会をやったりして PR しとる。そうゆうな形で、一般の人らにも会員になってもらって、山持っとる人だけでなしに。そうゆう緑化思想を普及しようと言うことで、森作り協会の役割もそういうことになるわけや。色んなイベントに参加する。植樹活動、それから育林。枝打ちしたり、草刈したりする。そういうものにも参加する。講演会にも話を聞きにいく。

苗木

苗木の周りや全体は、所有者がほとんどするんですけど、大面積の場合は人に頼む。植える木は、粘土質の場合は松の木。根が深いところは杉、檜、アテ、ヒバ。針葉樹は松、杉、檜、アテなど、広葉樹はケアキ、ナラ、クヌギなんかがある。肥料はやってないね。古くて 100 年やね。200 年くらい生き続けられるやろ。50 ～ 70 年で一人前やから伐採する。寿命の前に切って売ったり、必要に応じて切ることもあるね。

金と宝達山

宝達山での金は今でも出ます。ただ生産にならんので、今廃鉱になっとるけど。元々この金山ちゅうものは、加賀藩の前田藩の看板ちゅうかね、やっぱり加賀藩が金山を持っとるちゅうことが幕府に対してでも、非常に威厳があったわけや。ほで、ある程度採算を度外視してでも、金を採掘したんないかと思えんて。ここは元々金山でも、前田さん加賀藩の直轄金山やったんやね。ほで、宝達集落ちゅうのは、昔の人の言い伝えに、同じ集落でも前田さん加賀藩の直轄で集落そのものも加賀藩の管理下にはいっとったわけなんです。そうゆうことで、たいへん加賀藩がこの石川県の金山を管理しとるっちゅうがん。非常に前田藩にとっても、幕府に対しての威力を示す意味でも、非常に価値があったんないかねぇ、金そのものより。

水源の森への認定

私、その時分森林組合長やら県の会長をしとったので、東京で林野庁の長官から、水源の森百選の認定書をもろた。私は百選やから 100 人の 1 人として選ばれてん。これは個人に貰たんじゃないから、わたしゃ代表で貰たから。水源の森百選、看板でとるわね。私がそん当時、農林大臣から賞を貰って、協会作った時に会長せえちゅうことで、当時羽咋の森林組合長もしとったもんですから。そんな関係もあると思う。もうはや、私ももぅ歳やから、もうそろそろ協会長も今の役員の若い人らに引き継いでいかなならんと。どんな人でもいいんやけど、やっぱね、林業に関心がある人やねぇ。会長もずっとこれに専念しとるわけじゃないから。行事のあるときに、色んな企画したり、どうやって皆さんに森作りの大切さを理解していただくか、どういうためのどういうイベントをすればいいかと言うことやけど、やっぱり経費が伴うしねぇ。植樹活動ちゅても、木を植えるときは苗木代かかるし。植林したら、下草刈ったりせんなんから。ただでっちゅう訳にはいかん。経費がかかります。

苗木

戦争中戦後は、ずっと水田を作っとったわ。戦後、山の植林するための苗木を作ったりね。 苗木は挿し木、アテは挿

止水堤：このゴムで水を下に流して溝を作らないようにする

し木で作るが。スギやヒノキは苗木を買うてきて植えて、3年生くらいに大きくして出荷するわけや。3年かけて30～45cmにして山に植える。1年じゃまだ小さいから2年で植え替えする。苗木を作る業者として作って、それを森林組合が買い取って、組合に販売すると山へ植林することとなります。

作業道は私道路です。この作業道にある止水堤で雨水を下に流しとるんや。流すことで土が削られんようにしとるんや。木って言うのは、苗木を植えて、3～5年下刈りして、間伐を4、5回した後、50～80年で伐採します。

［取材日：2013年8月6日・11月16日］

PROFILE

谷光　一夫 たにみつ　かずお

昭和6年3月22日生・83歳
宝達山水源の森づくり協会会長

昭和25年3月　新潟農林専門学校（現新潟大学）卒業。昭和14年に父を、昭和24年に祖父を亡くす。家業の農林業を継ぎ現在に至る。昭和38年から押水町森林組合組合長、平成6年から平成21年3月まで羽咋森林組合組合長を務める。昭和51年から平成16年6月まで石川県森林組合連合会会長を務め、昭和42年から3期12年間押水町議会議員を務める。その他多数の政治、経済関係機関の要職を歴任している。

● 取材を終えての感想 ●

この「能登の里山里海人への聞き書き」を通して、もっと自然の美しさを知ることができました。初めはちゃんと取材ができるかとか、ちゃんと名人の話を理解できるかとても心配でした。しかし、谷光さんは私たちの質問に1つ1つ丁寧に答えて下さり、奥さんも私たちを笑わせてくれたりして、2人ともとても優しくリラックスして取材をすることができました。2回目の取材に行った時、谷光さんは山へ連れて行ってくれました。山の中はとても綺麗で、空気が澄んでいて自然に溢れていました。谷光さんは丁寧に木の種類などについて教えてくれました。この経験で、私は木や種の種類、林業や漁業、いろいろな事に興味を持ち、そしてその知識をもっと深く詳しく調べたいと思いました。そして自然の美しさを沢山の人に知ってもらいたいと思いました。素晴らしい体験をさせていただき本当にありがとうございました。

（階戸朝海　写真：左）

今回、谷光一夫さんという山の名人に取材させていただいた中で、普段私が何気なく見ている山に、こんな歴史や人の苦労があるんだとわかりました。木は私たち人間だけでなく、動物などの生活も支えています。木は私たちが生きていくために必要不可欠なものだということを学びました。名人に取材に行く前はとても緊張していましたが、奥さんも優しく緊張がほぐれるような笑顔で接してくださったおかげで、とても楽しく取材をすることができました。山へ写真を撮りに行った時は、「この木は杉の木だよ」などと、とても分かりやすく優しく教えて下さいました。最後に優しい谷光さんご夫婦と山の景色に出会わせてくださった方々に心より感謝します。本当にありがとうございました。

（櫻井萌子　写真：右）